

中世後期エノー伯領の農村共同体 —首邑慣習法文書と「自由と自治」—

斎藤 綱子

La communauté rurale dans le comté du Hainaut au
bas moyen âge
—Les libertés et autonomies dans les lois de chefs-
lieux—

Keiko SAITO

現ベルギー南部に位置する中世エノー伯領では、12世紀から16世紀にいたる中世盛期・後期において、領主と所領民の関係を規定する多様な法文書が起草されている。これらの文書の基礎は口頭で伝えられてきた慣習法にあり、慣習法の成文化が進行する中でも、口承による法も実効力を持ち続けた。だが、判告書（records de coutumes）が13世紀末以降起草される段階となると、成文法が大きな比重をしめ、その内容も著しく詳細なものとなっていく。さらに、判告書を継承する形で14世紀初以降出現する首邑慣習法文書（chartes des lois des chefs-lieux）となると、当該村落の共同体と領主との双務的契約にとどまらず、特に刑法関係の規範を核としてエノー伯領の裁判管轄区を枠とした均質的法の制定という要素がそこに入り込んできている。中世後期の村落共同体の性格を検討する場合、エノー伯権力の領域支配政策と在地の慣習法との関係が問題となってくるのである。本年度の研究対象として、エノー地方で最重要な首邑であるモンスの首邑慣習法文書の分析に焦点をあてた

のはこのような視点からである。

首邑慣習法文書は当該村落が刑法規定をもたない場合、首邑のエシュヴァンに諮問する形で賦与されるが、モンスのそれは1312年の Genly への文書を最古のものとして、以後16世紀初まで多くの文書が伝来している。モンスのエシュヴァンは1427年に1396-1426年に同都市に諮問を求めた村落の『記録』（registre）を作成しているが、ここには97の村落名が記されている。現存する文書を分析・比較すると、多くの内容は判告書と重なるが、顕著な相違点として、刑法関係犯罪の罰金の明確化という点が指摘される。特に『記録』作成以後に出された文書には『記録』とほぼ同一の罰金額が記され、首邑への諮問が恒常的制度となるにつれて、モンスの裁判管轄区における罰金の統一化が明確に現れているのである。さらに興味深いことは、1410年にエノー伯がモンスの裁判管轄区における首邑慣習法文書の発給に関する勅令を出しており、その前後に同文書の発給数が増大している点である。以上の点からして、中世後期の農村共同体の性格を究明する場合、モンスと並ぶ首邑であるヴァランシエンヌの首邑慣習法文書を分析し、両首邑慣習法文書を合わせて、この時期伯によって発布された伯領全体を対象とした法令と照し、全体法（coutumes générales）と村落の慣習法との関係を探ることが今後の課題となろう。